

神の目から見た教会を求めて

～クリスマスの起源について～

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 11 章 18 節

あなたはその枝に対して誇ってはいけません。たとえ誇るとしても、**あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。**

1. 初代教会の死

●初代教会は、この世に存在した組織の中で、最も強力な組織でした。異教はそれに対抗することができず、ギリシア哲学はその信仰を理解することができず「愚かなもの」とみなしました。しかし教会はさまざまな迫害を受けても、ますます拡大し続けました。しかし、6世紀までには、初代教会の特徴は完全に失われてしまったのです。なぜ、初代教会は本来のいのちを失ってしまったのでしょうか。それは、4世紀の初めに起こりました。一見、それは初めのうちはすばらしい祝福であるかのように見えたのです。

●初代教会に致命傷を負わせた出来事は、ローマ皇帝コンスタンティヌスの回心でした。紀元312年、ローマ帝国の政情がきわめて不安定な時でした。皇帝の座は空白で、支配権を得るために何人かの候補者たちがしのぎを削り合っていました。その中に、コンスタンティヌスとマクセンティウスがおりました。政治的葛藤の中、マクセンティウスがコンスタンティヌスに戦いを挑んだのです。

●この戦いはコンスタンティヌスの勝利に終わりましたが、その戦いにおいて、コンスタンティヌスは助けを求めて「至高の神」に祈ったのです。彼にとって「至高の神」とは、バビロンの太陽神である「ミトラ神」のことであったのです。しかし、祈りの答えとして、彼は、太陽の隣に燃える十字架がある幻を見たのです。その脇には、「これによって征服せよ」という言葉が見えました。コンスタンティヌスは皇帝の座に着くやいなや、自分がイエスに従う者であると発表したのです。

●これはクリスチャンたちには、信じがたいことでした。なぜなら、教会は何世紀にもわたって迫害を受けて来たからです。コンスタンティヌス帝の前の皇帝の時代(287～305年)には、最も過酷な迫害を受けたからです。何千人もの人々が拷問を受け、殺されました。多くの教会の指導者たちも命を失いました。ところが、今、新しい皇帝は自分がイエスの弟子だと主張しているのです。教会にとって、そのことは祈りの答えであるかのように見えたのです。不法な宗教とみなされていたキリスト教に対する迫害と嘲笑の時代は終焉し、かつて蔑視の対象であったクリスチャンの指導者たちは、栄誉ある立場に置かれるようになりました。

●コンスタンティヌス帝が教会に対して示した好意は以下のようなものでした。

- (1) 日曜日を公的なローマ帝国の休日とし、クリスチャンたちが自由に礼拝できるようにしたこと。
- (2) クリスチャンの兵士たちには、休暇を与えるようにしたこと。

後には、キリスト教が国教となったため、日曜日に休暇を取ることが帝国全体に義務付けられました。

(3) 新しい教会建設に多額の金銭を費やして、多くの教会堂、しかも壮麗な教会堂が建設されるようになりました。皇帝は教会に多くの土地を寄進しました。

2. 教会における変化

● 教会に対する好意の見返りとして、皇帝は教会を支配するようになります。ローマ法によれば、帝国内の宗教的な事柄は、すべて皇帝が管理するということになってしまいました。つまり、皇帝が宗教システムの指導者であったのです。キリスト教が国教として合法化された今、クリスチャンたちはコンスタンティヌスを教会の大祭司に相当する地位に歓迎したのです。

● 皇帝はいろいろな点において当惑を覚えるようになります。特に皇帝の心を煩わせたのは、キリスト教の中に含まれているユダヤ的要素です。その部分に対して、皇帝は変えるべく着手し始めました。315年、コンスタンティヌス帝は最初の教会会議を招集し、自ら議長を務めた「ニカヤ会議」(ニケイア会議)です。目的は教義論争の解決ということになっていましたが、皇帝は、教会を再編成して、新しいイメージを持たせるためにこの公会議を利用しようとしたのです。しかし、教会は皇帝の祝福に心から感謝し、皇帝のなすがままにさせてしまったのです。

● コンスタンティヌス帝がもたらした変化とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。

(1) 家の教会の消滅

● 初代教会は、家の教会に焦点を当てて機能していました。各地域教会は毎週各家庭で集まることが可能な少数者に分けられてミニストリーが行われていました。教会活動の基礎は家の教会でした。ところが、キリスト教公認直後、コンスタンティヌス帝はローマに大聖堂を建てました。この大聖堂の建築形式は「バシリカ」と呼ばれていますが、この建物の特徴は聖職者と一般信徒を完全に分ける構造になっていました。帝国の推奨と経済的後ろ盾によって、このような建築様式が急速に広まっていったのです。

● コンスタンティヌス帝は、「祈りの家」が廃止されなければならないという法律を制定し、クリスチャンたちが個人で家庭集会を持つことを禁じたのです。つまり、インフォーマルな家の教会から、格式ばったバシリカへの変化は、教会というものに関する概念を変えることになったのです。コンスタンティヌス帝以前、「教会」とは、信じる者たちの家族を意味していましたが、コンスタンティヌス帝以降は、教会は建物を指すようになってしまったのです。

(2) 礼拝の変化

● コンスタンティヌス帝は、教会の建物だけでなく、礼拝のあり方をも改善しようとしていました。家の教会での礼拝には、決まった形式や儀式はなく、聖霊に導かれた親密なものでした。しかし、コンスタンティ

ヌス帝が大祭司的立場になってからは、礼拝とは厳粛な公の儀式と化してしまっただけです。礼拝の順序や方法が書き記され、固定化していったのです。香を焚いたり、ろうそくをささげ持ったりすることが、礼拝の表現として、広められていったのです。礼拝に参加する者たちの主体性は失われ、祈りも成文化され、礼拝する信徒たちは観客化してしまっただけです。

(3) ユダヤ的ルーツの拒否

- 皇帝が変えたのは、礼拝の場所や方法だけでなく、教会の核心部分に大きな打撃を与えました。しかし彼は、それだけでなく、教会をユダヤ的ルーツから切り離して、異教的なものへ継ぎ合わせてしまっただけです。クリスマスこそがその一例なのです。

- 初代教会は使徒たちから受けついでユダヤ的なルーツを大切に、堅く守っていました。例えば、トローラーの学びを大切に、安息日や主の例祭を守り、ユダヤ人たちとの緊密な関係を保っていました。ところが、コンスタンティヌス帝が権力の座についてからというもの、これらすべてが変えられていったのです。

- 多くのローマ人同様、コンスタンティヌス帝はユダヤ人を嫌っていました。紀元 70 年、および 130 年に、ユダヤ人がローマ帝国に対して反抗し、徹底的に敗北して以来、ユダヤ的なものはすべて見下されるようになってしまいました。ユダヤ民族は「ローマに敵意を持つ被征服民」というレッテルを張られたのです。このようなユダヤ人に対する嫌悪感から、コンスタンティヌス帝は帝国内の教会の基準を、ユダヤ的要素を一掃して、非ユダヤ的なものにしようとして心に決めていたようです。そのことを示す資料が多くあります。

- 325 年のニケア公会議直後、司教たちに宛てた書簡の中で、コンスタンティヌス帝は、教会がユダヤ的習慣に従うのは「不適切」とであると記しています。コンスタンティヌス帝と同時代に生き、皇帝を支えた教会歴史家のエウセビオスは、ニケア公会議での決定を次のようにまとめました。「ユダヤ人の習慣に従っても意味がないように思われる。・・忌まわしいユダヤ人どもとは、共通点を持つべきではない。彼らの卑しい習慣すべてとの関係を断つべきである。」と。

- ニケア公会議以前は、クリスチャンたちはシナゴークに集い、ユダヤの祝日を祝っていましたが、公会議の決定は、キリスト教をそれまでゆり籠に結び付けていた最後の絆を断ち切るものとなったのです。ユダヤ的習慣を守る者たちは「破門」(追放することと、呪うこと)とされ、ついには、帝国に対する反逆罪を問われ、死罪とされたのです。その後何年もかけて、教会会議は、ユダヤ的ルーツに対する禁令を繰り返したのです。その禁令の中には、ユダヤ的ルーツとかかわり続ける者には、教会から破門するという脅しが伴ったのです。

(4) 異教の混入

- コンスタンティヌス帝は、教会をユダヤ的ルーツから切り離しただけではなく、異教の宗教と結びつけ

てしまいました。彼は、バビロンの太陽神であるミトラを熱心に信奉していました。彼はキリストに従うと公に告白しながら、彼は異教の神々をも堂々と礼拝していたのです。

●312年、コンスタンティヌス帝は、キリスト教の礼拝日をローマ帝国の休日としましたが、それを「キリストの日」とは呼ばず、「尊崇すべき太陽の日」としました。これは「日曜日」という名前の由来です。キリスト教徒であるはずの皇帝が、キリスト教の礼拝日に異教の太陽神をたたえる名をつけたのです。このような異教的な概念の混入によって、教会に多くの影響がもたらされました。

●コンスタンティヌス帝以前、教会がキリストの降誕を祝うことはありませんでした。しかし、異教徒であるローマ人には、12月25日に、ミトラ神の生誕を祝う習慣があったのです。274年には、アウレリアヌス帝が、すでにミトラ神の誕生日をローマ帝国の祝日と定めていたのです。コンスタンティヌス帝がイエスを太陽神の顕現と考えていたために、その日がキリスト教の祝日とされてしまったのです。これが「クリスマス」(キリストの降臨日)の経緯なのです。コンスタンティヌス帝の布告によって、異教化されたキリスト教が、公の基準になってしまったのです。

最後に

●今や、日本でも12月になると、商店街にはクリスマスソングが鳴り出し、ホテルでもクリスマス・ディナーが催され、地域でも子どもたちのクリスマス会があり、若者たちはクリスマスにホテルに泊まり、お寺でもクリスマス音楽会が催されています。「教会でもクリスマスやるんですか」という質問に至っては、まさに異教の霊がうごめく祭りさながらの始末です。果たして、キリスト教会は、ほんとうのクリスマスについて、何をどう取り組んでいくべきなのでしょう。

2019.10.14

●参考書

ロバート・D. ハイドラー著/ワーンダリ美奈子訳「契約のルーツ」(失われた相続物の回復)
オープンヘブン・ジャパン・パブリケーション、2015発行。